

宮川健郎 私の出会った児童文学者たち 第8回

第3章 あまんきみこさん

その2 現代の童話作家

あまんきみこさん（1931年～）と母宮川ひろ（1923～2018年）は、同人誌『どうわ教室』（1966年4月創刊）でいっしょに勉強した仲間だ。あまんさんは、母より8歳年下だが、母が亡くなるまで、50年あまりも、ずっと友だちでいてくださった。私も、小学生のころから現在まで、折々お目にかかることがある。

「何か事件がはじまるべき」

前回のおしまいに書いたように、あまんきみこ『車のいろは空のいろ』（ポプラ社1968年）が刊行されたとき、古田足日がたいへん批判的な意見を述べた（「現代のファンタジィを（1）」『学校図書館』1968年7月）。『車のいろは空のいろ』に収録された8編の連作短編のうち、一番早く発表された「くましんし」（『びわの実学校』第13号、1965年10月）については、こういう。

くましんしに出あうのは物語の発端であり、そこから「何か事件がはじまるべき」なのである。そして、その物語の展開の中で、くましんしのイメージはより豊かに、よりあきらかになっていくはずだ。（引用は古田『児童文学の旗』理論社1970年による。以下も同じ）

1950年代の「童話伝統批判」の動きのことは、この連載の第2回に書いた。古田の「くましんし」についての意見は、「童話伝統批判」を代表する書物の一つである、石井桃子他『子どもと文学』（中央公論社1960年）の「小川未明」の章を踏まえている。「小川未明」の章の執筆者はいぬいとみこ、いぬいの長編ファンタジー『木かげの家の小人たち』（中央公論社1959年）は、佐藤さとる『だれも知らない小さな国』（講談社1959年）とともに、「現代児童文学」を成立させた作品である。

「小川未明」の章で、いぬいとみこは、未明のごく短い幼年童話「ナンデモ ハイリマス」（『コドモノクニ』1932年1月）を紹介する。「ナンデモ ハイリマス」の正チャンはかわいらしい子どもで、着ている上着もかわいらしく、それについているポケットもかわいらしい。ポケットには何でも入る。ミルクキャラメルもビスケットも石ころも。ところが、きょうは、おかあさんから大きなみかんをもらった。こればかりは入らないと思っていたのだけれど、おねえさんに皮をむいてもらって、いくつものに分けたら、ポケットにも入った。ポケットには、何でも入ります。いぬいは、こう書く。

子どもはじぶんたちを、「かわいらしい」と思っているのでしょうか。それは、

大人の感情ではないでしょうか。もし、この同じテーマをつかって、子どものお話を書くとしたら、主人公の子どもが、ポケットにはなんでもはいります、という「発見」をしたところから、何か事件がはじまるべきなのです。（引用は1967年に刊行された福音館書店版による。以下も同じ）

いぬいは、つづけて、「幼児のもつ空想力を、外にむかってのぼそうとしないで、つねに大人の考えるかわいらしい「童心」の中に包みこんできた」と批判する。

古田足日の「くましんしに出あうのは物語の発端であり、そこから「何か事件がはじまるべき」なのである。」は、いぬいとみこの「ポケットにはなんでもはいります、という「発見」をしたところから、何か事件がはじまるべきなのです。」の繰り返しということになる。そして、古田のなかで、あまんきみこと小川未明が重ねられたことも、はっきりわかる。

いぬいとみこも古田足日も、小川未明やあまんきみこの童話を直線的な時間のなかで発展させようとする。しかし、未明やあまんの世界の時間は、それとはちがう時間なのではないか。（注1）

「何か事件がはじまるべき」（続）

いぬいとみこや古田足日の「何か事件がはじまるべき」ということばから、古田のもう一つの文章を思い出す。1965（昭和40）年に岩波書店から刊行された新美南吉童話集『おじいさんのランプ』の巻末の解説である。「何か事件がはじまるべき」とつながるのは、表題作「おじいさんのランプ」（初出は『おぢいさんのランプ』有光社1942年）に言及した部分だ。

『おじいさんのランプ』で、もっとも印象にのこるところとして、多くの人が、巳之助がランプを池の岸の木にともして、それを割っていく場面をあげています。

ここは非常に美しい場面なので印象にのこるのは当然のことですが、もし人間の原動力がもっと力強く書かれるなら、この美しさを圧倒する、力にあふれた美しさが巳之助のその後の行動として出てくるはずのものです。（引用は古田『児童文学の旗』前掲による。「新美南吉論」のタイトルで収録されている）

「おじいさんのランプ」に書かれなかった「巳之助のその後の行動」とは何か。

「おじいさんのランプ」は、倉のすみから古い台ランプを持ち出してきた孫の東一君におじいさんが語る話だ。50年前、みなしごだった13歳の巳之助の話である。巳之助は、村の家々のいろいろな手伝いをして、村の人たちに世話になって暮らしていたが、あるとき、人力車の先綱をたのまれて、峠のむこうの町に行く。大きな商店にガラスのランプが明るくともっていて、夜の町を照らしていた。ランプの明るさに魅入られた巳之助は、ランプを一つだけ仕入れて、村でランプ屋をはじめた。

ランプ屋の商売は、だんだんに成功して、巳之助は、それで身を立てる。家を建て、結婚もする。ところが、やがて、町に電気が引かれ、村にもおよぶことになる。ランプの時代が終わるのをおそれた巳之助は、ひどく混乱するが、それでも、はっとするようなきっかけがあって、心の危機を抜け出していく。巳之助は、夜中に家中のランプを持ち出して、池のほとりの木にみんなかけて火をともし。そして、石を投げて、一つ一つ割っていくのだ。――「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」（引用は宮川健郎編集『名作童話 新美南吉 30 選』春陽堂書店 2009 年による。以下も同じ）

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つ拾った。そして、いちばん大きくともっているランプに狙いをさだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前達の時世はすぎた。世の中は進んだ。」

と巳之助はいった。（中略）

こうして巳之助は今までのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。

巳之助の一代記は、この場面でもう語り終えられて、おじいさんと東一君の物語の現在にもどってきてしまう。おじいさんは、「巳之助さんは今でもまだ本屋をしている。もっとも今じゃだいぶ年とったので、息子が店はやっているがね。」と喋って話をむすび、さめたお茶をすすする。そして、おじいさんの語った巳之助とはおじいさん自身であることが、ようやく明かされる。

古田足日のいう、書かれなかった「巳之助のその後の行動」とは、もう中年になっていたはずの巳之助がランプ屋をやめて本屋になる後半生のことだろう。それこそが、巳之助にとって、ほんとうにたいへんな日々だったとも想像できる。しかし、新美南吉が描きたかったのは、石を投げてランプの灯を一つ一つ消していく「断念」の美学であって、巳之助のその後ではなかったと思う。

「童話伝統批判」の議論を引き受けるようにして成立した現代児童文学は、先にあげた、1959（昭和 34）年の『だれも知らない小さな国』『木かげの家の小人たち』にしても、60（昭和 35）年の山中恒『赤毛のポチ』（理論社）、松谷みよ子『龍の子太郎』（講談社）、今江祥智『山のむこうは青い海だった』（理論社）にしても、「何か事件がはじまるべき」と考えて書かれた長編だったのである。

古田は、「くましんし」を「連続する人生の一部を切り取り、人生の一断面をのぞかせる（中略）過去の童話の方法」（「現代のファンタジイを（1）」前掲）だとした。古田は、1950 年代に自分たちが批判し、克服したはずの小川未明に代表される童話が『車のいろは空のいろ』という本として再びあらわれたことに強い違和感をいだいたにちがいない。

童話作家たち

あまんきみこの『車のいろは空のいろ』は、宮下和男『きょうまんさまの夜』（福音館書店 1967年）とともに、日本児童文学者協会第1回新人賞を受賞する。中村新太郎の「審査経過報告」（『日本児童文学』1968年7月）には、「『車のいろは空のいろ』は、連作の形式の短編だが、幼年ものに新しい面をひらいていることはたしかである。現実と幻想の交錯という発想は、リアリズムとロマンチズムの結合という方法に根ざしていると思われるが、才能とエネルギーにみちた作品である。」とある。つづいて掲載されている筒井敬介の「新人賞選評」は、『車のいろは空のいろ』については「これはコントであるから、発想と語り口が相乗作用をしなければ、上等の作品にはならないと思う。うまくいきそうで、はっとするほどしぼんでいる部分が目につく。」とやや辛口である。

あわせて記しておくなら、宮川ひろの『るすばん先生』（ポプラ社 1969年）は、日本児童文学者協会第3回新人賞の候補になった。『日本児童文学』（1970年7月）に掲載された選考委員の評を読むと、長崎源之助や那須田稔が強く推したようだが、受賞はできなかった。受賞したのは、安房直子の「さんしょっ子」（『海賊』1969年12月）である。選考評のうち、上笙一郎「新人賞の作品を読んで」から引く。上は、児童文学・児童文化の評論家。

（『るすばん先生』は一宮川注）母親童話ということで好感を持たれたらしいが、しかしこれは言ってみれば生活童話であり、現代の日本児童文学がそのスタートにあたって否定したものではなかったか。

「生活童話」というのは、説明がむずかしい用語だが、プロレタリア児童文学が戦時下に後退した、ありかたといえばいいだろうか。（注2）「童話伝統批判」の口火を切った、早大童話会の「『少年文学』の旗の下に！」（『少年文学』1953年9月）には、つぎのくだりがある。

我々は「生活童話」を克服する。従来の超階級的童心主義に対して、現実の生活に取材せんとした意図はみとめるとしても、誤れるリアリズムは私小説性のわくを出ず、それは遂に少年「小説」にはならずして、あくまで生活「童話」にとどまり、綴方的リアリズムへの転落の道を辿った。（引用は日本児童文学者協会編『現代児童文学論集』1、日本図書センター2007年による）

これが、上笙一郎のいう「現代の日本児童文学がそのスタートにあたって否定した」ということにあたる。上は、かつて「『少年文学』の旗の下に！」を発表した鳥越信や古田足日らによって、1958（昭和33）年に結成された「児童文学実験集団」のメンバーだった。（注3）

しかし、このときに新人賞を受賞した「さんしょっ子」の安房直子も、あまんき

みこと重なる、詩的で象徴的な童話の書き手だった。宮川ひろの『るすばん先生』も童話と考えられたのなら、何人もの童話作家の新人が登場したことになる。(注4)

古田足日の「童話・小説の流れ その問題点」は、『車のいろは空のいろ』刊行の10年後、1978(昭和53)年に東京書籍から刊行された、日本児童文学者協会編『児童文学の戦後史』に書かれた評論である。書き出しはこうだ。

今まで何度も書き、また他人も発言してきたことだが、戦後の日本児童文学の歴史は大きくは二つに分けることができる。その画期を一九五九年(昭34)にするか、六〇年にするかは意見のわかれるところだが、ぼくは五九年説をとっている。ここは「童話」と「小説」のわかれめの年であった。(カッコ内原文。引用は古田『現代児童文学を問い続けて』くろしお出版2011年による。以下も同じ)

このあと、古田は、こう述べる。

ここで一つあきらかにしておきたいのは、いわゆる少年文学宣言(「少年文学」の旗の下に!)のここと一宮川注)及び、ぼくの『現代児童文学論』(くろしお出版1959年一宮川注)の共通のあやまりがあったことである。それは「童話」を死滅するものと考えた点である。今のぼくは、時代の発展につれて新しい表現形態が生まれ出され、前代の表現形態と共存していくもの、と考えている。ただし、このことが少年文学宣言、『現代児童文学論』のすべてを否定するものではないことは、いうまでもない。

そして、古田は、1986(昭和61)年には、「彼女(あまんきみこ一宮川注)は安房直子、立原えりかとともに、現代日本の「童話」を代表する。彼女たち三人は、ぼくの見方では小川未明の正統な後継者である。」(「あまんきみこメモ」『国語の授業』1986年2月、引用は『現代児童文学を問い続けて』前掲による)としている。(注5)

『北風をみた子』

あまんきみこは、「日常」が不意に別の顔を見せる、その瞬間をつかまえるという方法の童話作家である。それは、詩的、象徴的なことばによって行われるから、長編には発展せず、ほぼすべて短編である。六つの短い章(短編)から成る『北風をみた子』(大日本図書1978年)は、そのあまんにとって一つの大きな達成だった。

小学3年生のキクは、淀川の土手を前にした古い二階立てのアパートで、おとうさんとおばあさんと3人で暮らしはじめた。土手に出れば、川風がふいてくる。お

かあさんは、もう亡くなっている。

学校からの帰り道。キクは、3歳くらいの女の子がころんで泣いているのに行き会う。助けおこしてやったけれど、いっこうに泣きやまない。そこへ、買い物カゴをさげた若い女の人がかけてよってくる。女の子のおかあさんだ。おかあさんが「ちいちゃんの、いたいの、とんでいけ——。」とおまじないをすると、女の子は、うそのように泣きやむ。それを見ていたキクは、幼いころ、キクという名前がいいにくくて、自分も人も「ちいちゃん」と呼んでいたことを思い出す。

いまさっきの子、青い服の子。

あの子も、ちいちゃんとよばれていたんです！

（この、いまは、ほんとうの、いま？）

キクは、立っている場所の時間がすきとおった川の水のようにながれて、昔の場所に立ってしまっているのではないかと、おもいました。

（あの子は、あたし。あの人は、おかあちゃん、おかあちゃんや！）

（引用は『あまんきみこセレクション 冬のおはなし』三省堂 2009年による。「北風を見た子」の表記のタイトルで収録されている）

キクは、ずっと前にころんで、知らないおねえさんに助けてもらったような気がしてくる。あのおときのおねえさんは、だれだったのか。そして、いまのキクは？

これは、「ちいちゃん」の章の物語だ。キクのなかのイメージの川は、おかあさんの思い出につながる時間の流れに重なってくる。ここに描かれているのは、直線的な時間ではなく、可逆的な時間だ。そして、作中を流れる川は、このほかにも、いくつもの物語を引きよせてくる。

すぐれた短編の書き手である、あまんきみこの作品は、国語の教科書に数多くのもっている。1971（昭和46）年にもう「白いぼうし」が学校図書の小学4年、光村図書の小学5年の教科書に掲載され、1990年代以降、小学校の教科書についていえば、もっとも掲載数の多い作家である。（つづく）

（注）

- 1、小川未明やあまんきみこなどの童話の世界の時間については、宮川健郎「子どもの時間、児童文学の時間—成長物語と遍歴物語、童話と現代児童文学—」（『子ども学』第10号、2022年5月）を参照のこと。
- 2、日本児童文学学会編『児童文学事典』（東京書籍1988年）の「生活童話」の項目（執筆は藤田のぼる）には、つぎのようにある。

昭和六、七年から一〇年代のプロレタリア児童文学の後退期に、塚原健二郎、榎本楠郎らによって提唱された。児童の生活を社会的連帯の視点から描こうとした一群の作品を指す。この場合は生活主義童話とも呼ばれる。

- 3、上笙一郎「少年文学宣言」から児童文学実験集団へ」（『日本児童文学』1969

年7月)参照。

4、私自身の『るすばん先生』の読みかたについては、第3回を参照のこと。

5、『現代児童文学を問い続けて』には、初出が76年2月と記されているが、これは、誤記だと思われる。

(付記) 宮川健郎「子どもの時間、児童文学の時間—成長物語と遍歴物語、童話と現代児童文学—」(前掲)と重複する部分があることをおことわりします。